



岩波映画 絵を描く子どもたち。

見
て
も
ら
い
た
い
映
画

阪本越郎

—はしがき—

幼稚園の先生がたは、いつも園児のことで頭がいっぱいになっていられると思うが、時には自己の教養をつんだり、自己を解放したりするために、映画を見てもらいたい。暗い映画館のなかにいると眠くなってしまうような映画もずいぶんあるが、最近では、われわれの眼を驚かせ、ぐんぐんひきずっていくような映画も製作されているから、それを見てもらいたい。ひまがないとおっしゃるかもしれないが、ひまを作り出して、自分の視覚教育をするつもりで、見てもらいたい。

そういう映画について、私の気づいた範囲で、ここに紹介することにした。だいたい教育映画にかぎるつもりであるが、範囲は時によってははみ出すこともある。幼稚園の先生がたに見てもらいたいのが目的であるから、その製作目標が時には小学生や中学生

を対象とするものもあるが、それに拘泥しないことをあらかじめ御断りして置きたい。

絵を描く子どもたち パート 四巻
カラー 四巻

岩波映画製作所

対象 「教室の子供たち」という教育映画で昨年ブルー・リボン映画文化賞を得た岩波映画社が、同じく現職の教員及び父兄のために作った「絵を描く子供たち」は、最近の新聞や雑誌のジャーナリズムをにぎわせた問題作である。前の「教室の子供たち」の時の演出経験を生かして、たいへん快調に描き出した子どもの生態と心理を、絵を描く側面からとらえてある。教職を志す学生や教職に在る人々はもちろん、一般の父兄にも見てもらいたい映画である。

内容 撮影の舞台になったのは東京の江東区の小学校の一年の学級。子供たちの入学から六ヶ月間における期間。映画は、小学校の入学の日から始まる。両親の心づくしの洋服にハンカチをつけた一年生がぞろぞろ入ってくる。子供たちの性格も気持もまだ固まっていない。この子供たちは路上に絵をかいていた子供たちである。白い大版の画用紙をわたされても、どうしてよいか迷っている子供たちは、おそらく幼稚園教育は経てきていないのであろう。カメラはそういう子供たちが描

き出す絵を通してその成長ぶりを細かく追っかける。

最初からクラスで一番元気で乱暴だと思っていた子がいた。それが、ある日、頭をクリクリに刈られて出て来る。みんなにひやかされ、それからの態度がスッカリ変ってしまつた。その気持が、彼の描く絵にまで現われる。

マチノ君は、最初の図画の時間、おびえたような目で、まわりを見まわすだけで、とうとう最後まで、なにも描けず白紙のままだった。彼の家庭を見てみると、両親が不在がちでアパートの一室で、ひとり留守番をすることが多い。つぎの週の図画で、彼はさびしい一軒の家を白紙のまん中にボツンとかいた。はじめの五週間、彼の画は同じ家の絵だった。細い線で描かれた家の窓に、裸電球がひとつ下っていることもあった。

彼は色を使わず、鉛筆で細かく描いて行く。細いハシゴの上の魚つりの絵、たくさん魚の画は、細いものの繰返して、行きどころのない、不安な気持から抜け出していないのではなからうか。

そんな彼が学校に残って、無性に先生に甘えることがある。このマチノ君の心には、暖かいものを求める気持が強く宿っているのにながしいない。そのころ彼は「母クジラの乳を

吸う子クジラ」の絵を描いた。

学校に馴染め、先生に親しみをもち、その指導によって、しだいに自信を持ちはじめたマチノ君は、やがて動物園見学を終えたころ、はじめて色を使って、ニンジンと鼻先に巻いた大きな象を描いた。ニンジンの赤い色が実は鮮やかで目がさめるようである。(バート・カラー)

タガワさんは、最初から、空想的な絵を描く女の子だった。彼女のお父さんは大工、お母さんも内職をするしっかりした人、健康な家庭。彼女は家ではお手伝いもし、妹や弟の面倒もみる良い子である。が、どうも友だちになじめない内向性の子、教室でもひとりぽツンとしている時が多かった。だ菓子屋の店頭でも、ひとり群にはなれていないし、みんなで川へ遊びに行った時も、自分ひとりで穴を掘っている。

体操の時間、タガワさんは走りこいでピリになったことがあった。彼女は途中から走るのをやめて、泣きながら教室へ帰る。ところが次の時間は図画で、今までになくはげしい勢で絵を描きはじめた。青い茎の上に赤い花のチューリップを一本、そのまわりをらんぼうに濃い紫でかこってしまった。「紫は、失敗してふしあわせのときや、身体に故障のときによく使われる色です。強い赤は、ショッ

クのはげしさを物語っています」と解説が入る。この絵を描き終ると、気持が楽になったのか、色も明るく、さわやかな感じの花の絵を、その裏に描くのである。(バート・カラー)

タガワさんは、はじめは花の絵ばかり描いたが、やがてお姫さまの絵やともだちの絵をかくようになり、そのころには、それまでニガ手と思っていた体操の時間にも、自信がついて、ニコニコと鉄棒にまたがるようになった。

そのほか、オバケの絵を描く子、ダダダと機関銃の発射音を口にしながら、戦争画ばかり熱心にかく子などいろいろあり、先生は子どもたちが表現したいものをなんでもやらせる。フィンガー・ペインティングも、不透明絵具も、大きな黒板の楽書も自由にやらせる。粘土細工をはじめてやらせると、粘土の触覚を楽しみながら、長い長い蛇を作ってしまう子もいる。

こうして新しい材料と取りくむたびに、子ども達の顔はよるこびに輝やく。十月になると、もう最初の図画の時間にくらべて、子供たちの成長ぶりはこうも変わるものかと驚くばかりである。

指導 幼稚園教育でも、喜んで絵をかく、絵をかくことに興味をもち、自分の考えや気持

を絵で表現するということは指導要項に示されているところである。この映画は小学校一年生を対象としているが、幼稚園教育にも参考になるところが多いと思う。

この学校では美術教育の新しいやり方をとり、教師は子供の描いたものの欠点をひろわない。また、手本を示して、このように、描けとはいわない。教師は子供に自由に描かせるようにし向け、教師はオトギ話をしたり、川遊びや動物園につれていって子供の経験を富ませて、子供が絵をかく準備をし、子供を励ますことに一生けんめいである。そこで、子供は「どんな絵を描いても良いのだな」と安心して、気がねなく、のびのびと描くようになる。

このように安心を与えてやることによって、絵をかくこと自体が、子供の治療的な意味をもってくる。この映画で、子供の描く絵は、その子の生活環境や心理内容から切り離して考えられないものだということを示すとともに、どんな内気な子でも、あたたかく励ましてやれば、ゆたかな個性と美しさを表現する力をもっていることを物語っている。そういう点で見答えのする教育映画である。

この映画では、マチノ君やタガワさんの重要な絵がパトカラーで出している。そのため映画全体が色彩映画のような美しさを見せ



たことは成功であった。このような教育映画こそ天然色映画で見せるようになりたいものである。

ねんど教室—創造のよろこび—二巻

土田商事株式会社

対象 造形教育の一つとして、ねんど及び彫塑の初歩をとりあげたもので、小学校中学年から中等学校の生徒に見せたい。学校の図工教室を知るという意味で、PTAの父兄にも見てもらいたい映画である。

内容 幼稚園の砂場で砂の城をつくる子供の造形本能が、ねんど工作によって、いろいろな形のものをつくる。造形の基礎形態とその変化を示すことによって、粘土工作の意味を明らかにし、創造性を培うものとして、すなおな観察が重要であることを示す。実物のアヒルやニワトリやウサギを写生させたり、観察しながら粘土工作をやらせている三年生の教室が描かれている。

六年生になると、友だちをモデルにして、全身像の制作をやらせる。同じ人の顔でも、見る人によって、そのあらわれ方がちがってくるのである。こうして作った作品を保存するために、窯で焼かなければならない。この窯も自分たちで石をつみ、かべ土をぬってつくる。その窯で素焼とくすり焼の技法を学ぶ。焼かれた作品は、家庭にもち帰って喜ばれる。

小学校から中学校へうつると、石膏像の作

岩波映画 絵を描く子どもたち。



土屋商事 『ねんど教室』

り方を学ぶ。美術クラブの友だちが先生やお母さんに相談して材料費を出してもらって、遂にセメントの記念像を校庭の花だんに完成するのである。

指導 ねんど教室という題名であるから、粘土工作だけかと思うと、中学の石膏作りまで入っているので、教師はこれの使用にとまどうかと思うが、粘土工作が中心である。し

たがって、小学校の図工科の教材としてつかうことができる。粘土工作の導入段階に使用して、創造の意欲を喚起し、想像の世界の形象化がやがて実物の観察力によって写真にうつっていく過程を教えるのに適している。

小学校では祭を作ってあるところも多いと思うが、この映画によって、粘土工作から焼物工作への道を教えることができる。細部にわたっては、教師の補導が必要がある。

粘土から石膏作りにつづるのは、小学校では無理であるが、一つの夢として見させるがいい。中学校では、路傍などに見かける彫像が、粘土の領域から発展したものであることを知らせ、石膏作りの主題に社会性をもたせるべきことを教える。この映画全体の内容はなかなか豊富であるから、全体に妥当する単元目標

土屋商事 『ねんど教室』



を求めるより、全体を通じて、粘土工作の造形意識を盛り上げることに役立つものである。

(お茶の水女子大学教授)